

ご意見ご連絡は下記へどうぞ

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭 e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association

Website は「北海道野生動物研究所」と入力して下さい

2013年11月5日、UHB大学主催で、「熊とは、そして、札幌の市街地に熊が出て来る本当の理由」と言う題で、門崎允昭が約80分間、道新ホールで500名程の聴衆に講演をした際の全文の、今回はその7回目として、会報27号に続き掲載致します。お読み下されば幸甚です。

[21] 北海道で1970年から今日(2013年10月末)に至る44年間に、熊による人身事故は、81件発生しています。この内猟師が撃ち損じて逆襲された事件32件(死亡9件、生還23件)、一般人の事故は49件で、(発生件数は年平均1.09件)、内死亡が20件、生還が29件です。死亡20件の内、武器で熊に反撃したのは1件のみで他は、皆素手で熊に対抗し殺されている。これに対し、生還した29件の被害者は皆、鉈・包丁・手鎌・ハシ等で、また武器になる物が無い場合には、石などを拾い掴み持ち、手足をばたつかせて、熊に積極的に、反撃しているのが特徴で、(聴きとりをすると、被害者は、皆、無我夢中で熊に抵抗したと証言している)いずれにしても、熊に積極的に抵抗反撃し生還している。襲い掛かって居る熊に反撃すれば、熊が更に猛り、被害が大きくなるのではないかと、想像で反論する者がいるが、そう言う人には、熊による人身事件を複数例検証して見なさいと私は言うことにしている。81件の事例を検証した限り、そう言う事例は全くありません。

[22] 熊ばかりでなく、動物に襲われて、その難から己の身を守る原則は相手に対し積極的に反撃することが原則であることは、人同士の場合も含めて動物界における基本原理常識です。

[23] 2013年も道内で熊による人身事故が4件発生し、内1件は猟師の事故で、他の3件は一般人の事故です。この3件の事故の内、4月16日の瀬棚町での、山菜のカクリ採りの52歳の女性は鳴り物も武器も不携帯で、熊に襲われ腕や大腿部の筋肉部を喰われ死亡した。それに対し、二件目の4月29日の静内町での、アイヌ採りの53歳の男性は、熊に襲われ胸と腰背部に爪での浅い引っ掻き傷を受けたが、アイヌを切り取る為に持参した長さ20cm程の普通の紙切り鋏で反撃し、難を逃れている。また、3件目の9月24日の函館でヤブドリ取りの男性が熊に襲われた事故は、被害者が高い場所の葡萄を切り取るために持っていた柄の長い剪定ハシで応戦し難を逃れています。

[24] アイヌは山野での熊に対し、如何に対処していたかと言いますと、万が一熊に襲われた場合の身の保全のために、男は外出の際、常に、左の腰にタシロ(tasiro=tasiho、山刀)と言う刃渡り 30~40cm 程の細身ながら、先が尖った鉈に似た刃物を着け、右の腰にはマキリ(makiri: 小刀)と言う刃渡り 20cm 程の小刀を着け携帯したとある。アイヌの女も普段から刃先が少し短いマキリを携帯していて、隣りの家を訪問する際もマキリを持ち歩いたとある(このことは、アイヌの民俗学者である萱野茂さんが、アイヌの民具で、また松浦武四郎は廻浦日記に書いています。アイヌはこのように熊に対して用心していたということです。

[25] 以上の実態からも、熊に襲われての生還には刃物での反撃で、熊に痛いと感じさせることが、有効な事は明白です。そこで、私が推奨したいのは、戦前から山子が持ち歩いていた鉈です。鉈は我が国で誰もが合法的に携帯し得、しかも熊に襲い掛かられた場合の有効な武器であり、鉈の携帯まで踏み込まなければ、熊による死亡事故は現状より減少させ得ない事を認識すべきです。

[26] 熊との遭遇を予防する手段として、自然に無い音を出して進む事が有効ですが、ラジオは音が出っぱなしで、熊との遭遇(異変)に気づき難いこと、小型の鈴は音が沢音でかき消され熊に音が届かないことがあるから不適で、ホイッスルが最適であることを私は強調したい。時々で良いから、ホイッスルを吹けば、その音は山中にこだまし響く。そうすることで、遭遇による事故は防げると私は確信しています。

[27] それにしても、道の「あなたとヒグマの共存のために」と言う道民向けのパンフレットには「熊に襲い掛かられたら(これは爪や歯で襲われている状態を言う)、首の後を手で覆い、地面に伏して死んだふりをして下さい。山に入る人は万に備えて練習して下さい」とある。しかし私はこれは全く間違った対処法だと言いたい。これを作ったのは道職員で熊研究の第一人者として、マスコミによく登場する間野勉君、北大の坪田教授、登別の熊牧場の前田菜穂子君、知床財団の山中君ら、北大出の熊研究者、なる連中です。私から言えば、この対処法は妄言としか言いようがない。間野君は熊の攻撃は 30 秒から 1 分で終わるから其の姿勢で我慢せよと新聞に書いている (2004,9/7 道新、それから今年の 10/14 道新に書いて居る)。皆さんどうですか、まず熊の爪や歯での攻撃に意識ある状態で無抵抗で耐え得る人間居るとお思いですか。こんな連中が道や札幌市の熊対策を、税金使い行っているんです。そして、マスコミは熊研究者として、持ち上げて居るんです。熊による人身事故を複数例検証してみれば、自分でも如何に無責任な事を言っているか分かるはずですが、していないから、臆面もなく言える訳です。これは無知として、見過ごせない事で、公務員らが言うべき事ではありません。 (了)